HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	19世紀前半ボヘミアにおける愛国者のネットワーク ： カトゥシツェ村の農民クロウスキーの事例から
Author(s)	桐生, 裕子
Citation	スラヴ研究, 61, 83-107
Issue Date	2014-07-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56920
Type	departmental bulletin paper
File Information	SS61_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[研究ノート]

19 世紀前半ボヘミアにおける愛国者のネットワーク

── カトゥシツェ村の農民クロウスキーの事例から ──

桐　生　裕　子

はじめに

本稿の目的は、19 世紀前半、ハプスブルク君主国下のボヘミアにおける「愛国者（vlastenci）」のネットワークの具体的様相を、ある農民の事例研究を通じて明らかにすることにある。

19 世紀以前のボヘミアにおいては、ドイツ語が行政・学術・芸術をはじめとする諸領域において優越し、社会的エリートが主に利用する言語として機能していた [(1)]。しかし、1770 年代頃から「愛国者（vlastenci）」と呼ばれる人々が現れ、彼らを中心にチェコ語を学術・芸術・社交の場で用いる言語として確立し、チェコ語を媒介とする新たなコミュニケーション空間を形成しようとする動きが生ずる [(2)]。

従来の研究では、この過程は「民族再生（národní obrození）」と呼ばれ、三十年戦争中のビーラー・ホラの戦い（1620 年）の後、ハプスブルク家によって過酷なドイツ化が推し進められるなか、農村民衆の間で細々と保存されたチェコ語・チェコ文化を再び復興し、彼らを核としながら「チェコ民族」を「再生」させてゆくプロセスとしてとらえられてきた [(3)]。しか

1　しばしばボヘミアでは、ハプスブルク家によってチェコ語の使用が禁止されたと言われてきたが、そのような事実は存在しない。近世期にドイツ語が優勢となった理由としては、ドイツ語の方がより国際的に通用する言語であったこと、また学問上の国際語であると同時に行政言語としても利用されていたラテン語が、俗語の使用が広まる過程で大部分ドイツ語に置き換えられていったこと、などが考えられる。薩摩秀登『図説チェコとスロヴァキア』河出書房新社、2006 年、59–61 頁；ニーデルハウゼル・エミル（渡邊昭子他訳）『総覧東欧ロシア史学史』北海道大学出版会、2013 年、83 頁。近世ヨーロッパにおける言語の使用については、ピーター・バーク（原聖訳）『近世ヨーロッパの言語と社会』岩波書店、2009 年。

2「愛国者」は、当初祖国（vlast）とその過去、祖国の言語であるチェコ語を愛することに価値を見いだす人々を指す語として用いられた。なおこの時代の祖国の定義は、論者によって揺らぎがあったが、狭義には自分の生地、広義にはボヘミア王国と基本的に理解してよい。愛国者はチェコ語を重視する点では一貫していたが、思想的には多様であり、その内容やネイションのとらえかたについては時代とともに変化が見られた。愛国者の思想とその時代的変遷についてはクトナルが詳細な研究を著しており、また筆者も別の所で論じたことがあるため、本稿では詳しく扱わない。František Kutnar, *Obrozenské vlastenectví a nacionalismus* (Prague, 2003); 桐生裕子『近代ボヘミア農村と市民社会：19 世紀後半ハプスブルク帝国における社会変容と国民化』刀水書房、2012 年、第 2 章。

3　本稿では、národ の語を原則的に「ネイション」と訳す。但し národní obrození については、この概念自体が národ の原初論的理解に基づき、また訳語としても定着していることから、「民族再生」と訳す。

し、近年ではネイション（národ）の構築性が指摘されるようになるなかで、「民族再生」と呼ばれてきた過程についても、新たな文化的・政治的主体としてチェコ・ネイションを創出しようとする動きの一環としてとらえるアプローチが主流となりつつある。

新たなアプローチによる研究の進展に大きく寄与したのが、1960 年代から活動を開始したフロホである [(4)]。フロホはマルクス主義歴史研究の成果を参照しつつ、ネイションを、近代に形成される相互に連関する多様な関係（verschiedene Arten von Beziehungen）の統合体ととらえた。そして、多様な諸関係の統合体にネイションとしてのまとまりを与えるネイション意識（Nationalbewußtsein）は、所与のものではなく、ネイション形成運動の帰結として創出されると指摘し、ネイション形成を三つの段階からとらえる「三段階テーゼ」を打ち出した [(5)]。フロホの研究は、近代のネイションが形成されたものであると明確に指摘するとともに、ネイション形成を多様な条件に規定された社会的運動として分析する視角を提示し、チェコ史研究のみならず広くナショナリズム研究にも大きな影響を与えた。

フロホの研究をひとつの転換点として、愛国者の活動をとらえる視点は変化し、新たな文化的・政治的主体としてチェコ・ネイションを確立しようとする動きの一環としてとらえる見方が主流となっていった。同時にネイション形成を社会的運動としてとらえる視角が提起されたことによって、研究対象にも変化が生じた。従来の研究は、文人・学者を中心とする著名な愛国者によって生み出された文芸作品や、言語学をはじめとする研究の成果、あるいは彼らのバイオグラフィーを検討することに重点を置いていた [(6)]。しかし、近年では文人・学者によって開始された活動が、彼らの狭いサークルを超えて広がる過程に関心を向け、その過程を支えた諸制度・諸組織――出版物の刊行、読書協会や演劇サークルをはじめとする結社的組織、学校や劇場の建設運動など――に注目する研究があらわれている。

なかでも重要なのは、1999 年にフロホ自身が発表した研究である [(7)]。上述した 1960 年代のフロホの著書は、愛国者の社会的構成の分析に重点を置いていた。これに対し 1999 年の研究では愛国者の思想、活動の前提、出版物の刊行や組織の設立をはじめとする実際の活動内容、そして活動の成果について検討し、各時代の社会的・政治的・文化的状況のもとで愛国者の活動がいかに広がったか、より具体的に把握することを試みている。

またシュタイフは、フロホの研究を参照しつつ、プラハの知識人を中心とする愛国者の活

---

4 Miroslav Hroch, *Die Vorkämpfer der nationalen Bewegung bei den kleinen Völkern Europas* (Prague, 1968); idem, *Social Preconditions of National Revival in Europe* (New York: Columbia University Press, 2000; original edition, Cambridge University Press, 1985).

5 このテーゼによれば、近代のネイションは、①知識人たちの狭いサークルの間で言語・歴史・民俗の研究や、文芸的創作活動が進められる段階（A 段階）、② A 段階の成果が狭い知識人のサークルを超えて流通する段階（B 段階）、③政治的要求を伴った大衆的な運動が展開される段階（C 段階）、という三つの段階を経て形成される。そしてフロホは、近代ネイションの形成過程を解明すべく、ネイション形成運動初期の担い手の階層・社会的出自・居住地等を、チェコを含むヨーロッパの小ネイションを対象に比較検討し、ネイション形成運動を多様な条件に規定された社会運動としてとらえる視角を提示した。

6 Kutnar, *Obrozenské vlastenectví*, pp. 349–354; Miroslav Hroch, *Na prahu národní existence* (Prague, 1999), pp. 5–6; Josef Kočí, *České národní obrození* (Prague, 1978), pp. 457–458.

7 Hroch, *Na prahu národní existence.*

動とその普及の過程について、活動を受け入れる側――小都市住民や農村住民――のメンタリティー、出版物の刊行や劇場・学校建設などプラハの愛国者と地方住民とを結びつける諸制度・諸組織に注目して、検討している[8]。

これらの研究は、愛国者の活動をネットワークの形成と拡張という視点を交えて考察し、愛国者の活動が広がる過程を具体的に解明しようとした点で評価される。他方で、大きな問題も抱えている。フロホとシュタイフはともに、近代ネイションに先行するものとして、エスニック集団の存在を前提としている[9]。そのため愛国者の活動の普及も、基本的にエスニック集団による「ナショナル・アイデンティティ」の受容という目的論的・単線的過程としてとらえられている[10]。そして、ネットワークも、プラハの愛国者から地方住民に「ナショナル・アイデンティティ」を一方向的に伝達する伝達網としての位置づけを与えられているにすぎない。従ってフロホやシュタイフは、愛国者の活動が普及する上でのネットワークの重要性を強調してはいるものの、考察の中心となっているのはやはりプラハの愛国者であり、地方の愛国者の活動や愛国者の広域的なネットワークについては具体的に分析していない。これは偶然によるものではなく、エスニック集団を前提とする彼らのネイション理解自体にその理由があると考えられる。

しかし、近年のネットワーク研究は、ネットワークが単なる情報の伝達網などではなく、言説が機能する空間を創出するもの、イデオロギー形成の媒体であることを指摘している[11]。この指摘を参照するならば、愛国者のネットワークも単なる「ナショナル・アイデンティティ」の一方向的な伝達網とはとらえられず、その考察にあたってはむしろ人々がいかなる相互交渉を展開したかに注目しなければならない。また上述したように愛国者のネットワークが拡張する上で、出版物や結社的組織が重要な機能を果たしたことが指摘されている。ボヘミアでは、18 世紀末に国家による初等教育制度の整備が開始され、読書、そして出版物が普及する重要な前提を形成した[12]。但し、それ以前から、ボヘミアには農村住民を含む民衆の間に読書をし、年代記・日記・回想録などを執筆する人々――チェコ語で písmáci と呼ばれる――が存在し、また彼らが相互に接触していたことも知られている[13]。つまり民衆の読

8 Jiří Štaif, *Obezřetná elita* (Prague, 2005).

9 Hroch, *Na prahu národní existence*, pp. 7, 10; Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 112, 216. なおフロホの 1999 年の研究では、以前の研究に比べ、近代ネイションに先行するエスニック集団の重要性が強調されている。

10 キングは、エスニック集団はネイションの前段階として存在する所与のものではなく、両者は構成上の依存関係にあり、エスニック集団とはむしろナショナルな思想に基づく産物（national products）であると指摘し、エスニック集団の存在を前提とした見方を批判している。Jeremy King, *Budweisers into Czechs and Germans* (Princeton: Princeton University Press, 2002), pp. 6–9.

11 稲垣春樹「帝国と宣教」『史学雑誌』121 編 6 号、2012 年、74–79 頁。

12 桐生『近代ボヘミア農村』55–57 頁。

13 písmáci という呼び名は聖書（Písmo）に由来し、当初は聖書や宗教書を読む人々を指したが、次第に読書をし、年代記や日記などを書く人々を指す語として用いられるようになったといわれる。písmáci については、以下の文献を参照。František Kutnar, *František Jan Vavák* (Prague, 1941); Otakar Nahodil, Atonín Robek, *České lidové kronikářství* (Prague, 1960); Antonín Robek, *Lidové zdroje národního obrození* (Prague, 1974).

書は学校内だけで習得されるものではなく、人と人との結合関係に支えられつつ普及したと考えるべきであろう[14]。近年盛んな読書研究や結社研究も、読書の普及や結社の出現が、人々の社会的結合関係や社会的・政治的・文化的実践の変化を伴ったことを明らかにしている[15]。従って出版物や結社を介した愛国者のネットワークの拡張も、「ナショナル・アイデンティティ」の受容といった目的論的・単線的・静的過程としてではなく、いかに人々の間で読書や結社活動が広まり、それとともに人々の社会的結合関係や実践がどのように変化したかといった点にも注目して、その動態が明らかにされなければならない。つまり愛国者の活動とネットワークは、形成されるべきネイションをあらかじめ措定するのではなく、こうした動態のなかでとらえられるべきなのである[16]。

そこで本稿では、ある農民の事例を取り上げ、彼がいかに愛国者の活動に加わり、どのようなネットワークを形成しながら活動を展開したか、愛国者の相互交渉、社会的結合関係や実践にも注目しながら検討し、新たな視点からの愛国者のネットワークの研究の進展に一定の貢献を行うことを試みたい。

本稿で取り上げるのは、中央ボヘミアのカトゥシツェ（Katusice）村の農民、ヤン・クロウスキー（Jan Krouský）である。クロウスキーは隷農制下の農村に生まれたが、近隣の村に赴任してきた司祭の影響のもと愛国者の活動に加わり、19 世紀前半から愛国者として活躍した。そして、隷農制が廃止された 1848 年革命期以降は、活動の領域をさらに広げ、1860 年代以降はボヘミア議会議員としても活躍することになる[17]。

本稿でクロウスキーを取り上げるのは、第一に愛国者のネットワークが拡張する上での農村と農民の重要性からである。1960 年代以降の研究の進展のなかで、従来「民族再生」ととらえられてきた過程が、農村民衆を核とする「チェコ民族」の「再生」などではなかったことが明らかになり、愛国者の活動が都市の知識人を中心に生じたという認識が広まった[18]。そのため、愛国者をめぐる新たな研究は都市を中心に進められ、農村についてはほとんど研

14　喜安朗『近代フランス民衆の「個と共同性」』平凡社、1994 年、256–257 頁。

15　読書や結社に関する研究は数多いが、読書については例えば、ユルゲン・ハーバーマス（細谷貞雄、山田正行訳）『公共性の構造転換』未来社、1994 年（第二版）；ロジェ・シャルチエ（松浦義弘訳）『フランス革命の文化的起源』岩波書店、1999 年；喜安『近代フランス民衆の「個と共同性」』。結社については、Pieter M. Judson, *Exclusive Revolutionaries: Liberal Politics, Social Experience and National Identity in the Austrian Empire 1848–1914* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1996); 槇原茂『近代フランス農村の変貌』刀水書房、2002 年；シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン（山本秀行訳）『市民結社と民主主義』岩波書店、2009 年。

16　ネイション形成を自明の過程ととらえる見方を批判した近年の研究としては、住民の間で見られた「ネイションへの無関心さ」に注目したザーラの研究が重要である。Tara Zahra, *Kidnapped Souls: National Indifference and the Battle for Children in the Bohemian Lands 1900–1948* (Ithaca: Cornell University Press, 2008).

17　Marie Lišková, *Slovník představitelů zemské samosprávy v Čechách 1861–1913* (Prague, 1994), p. 163. なおクロウスキーの経歴は、農民として一般的なものとは言い難いが、同時期にボヘミア議会議員を務めている農民は他にも存在し、彼の経歴を完全な例外とみなすことはできない。桐生『近代ボヘミア農村』313 頁。むしろ農民のなかからクロウスキーのような人物が現れてきたところに、19 世紀ボヘミア社会の変化が反映していると考えるべきであろう。

18　Hroch, *Die Vorkämpfer*, chapter 2; idem, *Social Preconditions*, chapter 9.

究が行われてこなかった[19]。しかし、フロホが明らかにした愛国者の社会的構成は、19 世紀前半、プラハに次いで多くの愛国者が居住していたのは農村であり、1840 年代にはさらにその比重が増したことを示している（次頁表 1）[20]。また農村の愛国者の中心は聖職者であったが、やはり 1840 年代になると、農民の中からも愛国者になるものが増加している。愛国者の活動は、特に 1830 年代から 40 年代にかけての時期に広がったといわれるが[21]、以上の点からも、愛国者のネットワークの拡張を考察する際に、農村および農民は無視できない重要性を持つと考えられる。

クロウスキーを取り上げるのは、第二に彼の書簡が史料として利用できるという、史料上の理由による。文人・学者を中心とするプラハの著名な愛国者が書簡や著作を残しているのに対し、地方の愛国者にかんする史料は少ない。後に述べるように、クロウスキーの書簡は欠損が多く、彼のネットワークと活動の全貌を知るためには不十分なものである。しかし、地方の愛国者が書き残した史料として貴重であり、その分析を行うことは今後、地方の愛国者について研究を行う視角を獲得する上で意義があると考えられる[22]。

なお上述したように、クロウスキーは 19 世紀前半から愛国者として活躍したのち、19 世紀後半にはボヘミア議会議員としても活動する人物であり、筆者は既に 1850–60 年代の彼の政治的・社会的活動について論じたことがある[23]。ボヘミア史研究においては 1848 年革命期前後での研究の断絶が顕著であるが、本稿で 19 世紀前半のクロウスキーについて検討することによって、ひとりの人物を通じて 19 世紀のボヘミア社会の変化を継続的に考察する見通しが開かれることも期待している。

それでは以下、クロウスキーの事例から、19 世紀前半の愛国者のネットワークの具体的様相について考察してゆく。まず第一節では、クロウスキーの経歴と彼が愛国者として活動しはじめた経緯について検討する。そして、第二節以降で、クロウスキーの書簡の分析を通じて、彼のネットワークと活動について検討してゆきたい。

1. クロウスキー

ヤン・クロウスキーは、プラハの北東約 50 キロ、肥沃な農業地域に位置するカトゥシツェ村の農民であった（以下、本稿に出てくる地名は第二節第二項の地図 1 を参照）。1834 年に出版された地誌によれば、カトゥシツェ村は戸数 53 戸、人口 309 人とこの地域では平均的

19 従来の愛国者にかんする研究がプラハを中心に行われていることを批判し、地方の愛国者のネットワークに注目したプファフの研究は貴重である。しかし、彼も都市の重要性を強調し、地方都市を中心に考察を行っている。Ivan Pfaff, *Obrozenská společnost na Vysočině* (Prague, 1995).

20 表の作成方法については、Hroch, *Social Preconditions*, pp. 45–46.

21 Hroch, *Na prahu národní existence*, p. 233; Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 98, 145.

22 19 世紀前半、ボヘミア各地に愛国者のサークルが形成されていたことは、これまでも指摘されてきた。しかし、具体的な検討はほとんど行われておらず、今後の大きな課題といえる。Hroch, *Social Predconditions*, pp. 50–52; Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 159–164; Iva Heroldová, “Rozvoj školství a osvěty v Čechách v době národního obrození,” in *Etnografie národního obrození* 5 (Prague, 1978), p. 38.

23 桐生『近代ボヘミア農村』第 4 章第 2 節。

表1　フロホによる19世紀前半ボヘミアの愛国者の構成

① 1827–41年　② 1842–48年　※表中の数値は人数、カッコ内の数値は割合を示す。

	プラハ		都市（人口5000人以上）		都市（人口2000–5000人）		都市（人口2000人以下）		村およびタウンシップ		合計	
	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
1. 貴族、所領所有者、高級官吏	**54**	**28**	**6**	**4**	**3**	—	—	—	**6**	**12**	**69 (7.7)**	**44 (2.4)**
2. 都市民	**20**	**61**	**13**	**33**	**29**	**57**	**2**	**25**	**7**	**35**	**71 (7.9)**	**211 (11.4)**
—商人	5	19	3	17	10	12	—	7	—	4	18 (2)	59 (3.2)
—企業家	1	8	1	3	4	3	—	2	—	—	6 (0.7)	16 (0.9)
—手工業者	14	34	9	13	15	42	2	16	7	31	47 (5.2)	136 (7.4)
3. 自由業	**69**	**55**	**7**	**10**	**7**	**18**	—	**3**	—	**3**	**83 (9.2)**	**89 (4.8)**
—博士	19	26	1	7	7	17	—	3	—	3	27 (3)	56 (3.0)
—法律家	17	8	1	1	—	—	—	—	—	—	18 (2)	9 (0.4)
—芸術家など	33	21	5	2	—	1	—	—	—	—	38 (4.2)	24 (1.3)
4. 官吏	**25**	**63**	7	**27**	**34**	**64**	**15**	**39**	**43**	**103**	**124 (13.8)**	**296 (16.1)**
—領主吏	4	4	2	4	15	38	14	20	40	79	75 (8.3)	145 (7.9)
—その他官吏	21	59	5	23	19	26	1	19	3	24	49 (5.4)	151 (8.2)
5. 聖職者	**20**	**21**	**13**	**29**	**72**	**85**	**44**	**70**	**164**	**248**	**313 (34.8)**	**453 (24.6)**
6. 教師	**19**	**41**	**9**	**20**	**17**	**23**	**2**	**8**	**8**	**25**	**55 (6.1)**	**117 (6.3)**
—ギムナジウム教師	6	16	6	9	8	12	1	—	—	—	21 (2.3)	37 (2)
—その他教師	13	25	3	11	9	11	1	8	8	25	34 (3.8)	80 (4.3)
7. 士官、兵士	**4**	**8**	—	**4**	**1**	**5**	—	**1**	—	—	**5 (0.5)**	**18 (1.0)**
8. 学生	**113**	**257**	**14**	**77**	**28**	**107**	**1**	**9**	**4**	**40**	**160 (17.8)**	**490 (26.6)**
9. 粉挽き	**1**	**7**	—	**2**	—	**2**	—	**2**	**2**	**15**	**3 (0.3)**	**28 (1.5)**
10. 農民	—	—	—	—	—	—	—	**1**	**2**	**28**	**2 (0.2)**	**29 (1.6)**
11. 労働者、従業員	**1**	**5**	—	**2**	**2**	**2**	—	**4**	**2**	**10**	**5 (0.6)**	**23 (1.3)**
12. 主婦、その他	**3**	**10**	**3**	**6**	**2**	**14**	—	**1**	**2**	**15**	**10 (1.1)**	**46 (5.5)**
合計（%）	329 (36.6)	556 (30.2)	72 (8.0)	214 (11.6)	195 (21.7)	377 (20.4)	64 (7.1)	163 (8.8)	240 (26.7)	534 (29.0)	900 (100)	1,844 (100)

Hroch, *Social Preconditions*, p. 48をもとに作成。

な規模の村といえ、1842 年の土地保有の記録では農民（Bauer）24 人、小農（Chalupner）11 人、小屋住み（Häusler）14 人が確認できる。また住民の大半はカトリックであり、コヴァーン（Kováň）教区に属す支教会が存在した。クロウスキーは、1842 年の時点で約 38 ヘクタールの土地を保有した富裕な農民であった[24]。さらにクロウスキー家は代々村長を輩出しており、ヤン自身も村長を務めたことから、村の名士と呼べる人物であったと考えられる[25]。

なおカトゥシツェ村の周辺で、政治・経済・文化活動の中心として機能していたのが、同村の南東約 10 キロの場所にあり、ムラダー・ボレスラフ県の県庁所在地であったムラダー・ボレスラフ（Mladá Boleslav）である。市も開かれたムラダー・ボレスラフは、ボヘミアの都市としては比較的大きな部類に属し、人口の約 4 分の 1 が商業・手工業に従事していた[26]。またプラハのほかニンブルク（Nymburk）、ソボトカ（Sobotka）、トゥルノフ（Turnov）、チェスカー・リーパ（Česká Lípa）方面に向かう道路が走っており、交通の要所でもあった[27]。

1814 年生まれのクロウスキーは、カトゥシツェの下級学校で学んだ後、2、3 年ほどビェラー（Bělá）の修道院付属学校（klášterní škola）に通って、学校教育を終えた。なお修道院付属学校ではドイツ語の正書法を学んだとされるが、下級学校ではチェコ語で教育を受けたと考えられる[28]。学校教育を終えた後、彼は家で農業に従事したが、若いころから読書を好み、当初はチェコ語による民衆啓蒙を目指すクラメリウス（V. M. Kramerius）が設立した出版社チェスカー・エクスペディツェ（Česká expedice）の暦書、旅行記、物語などを読んでいた[29]。その後は、プラハ大学におけるチェコ語・チェコ文学の最初の教授となったペルツ

24 Johann Gottfried Sommer, *Das Königreich Böhmen*, vol. 2 (Prague, 1834), p. 143; Státní okresní archiv Mladá Boleslav (SOA MB), fond Katusice, kniha č. 43, Grund-Parzellen Protokoll der Gemeinde Katušitz, 1842.

25 Jan Šafránek, “Z doby národního rána českého,” *Časopis pro dějiny venkova* (1917), p. 185.

26 人口は 1830/34 年に 4923 人、1843 年に 5037 人を数えた。Ludmila Kárníková, *Vývoj obyvatelstva v českých zemích 1754–1914* (Prague, 1965), p. 117.

27 ムラダー・ボレスラフとプラハとの間には急行馬車も運行されていた。František Bareš, *Paměti města Ml. Boleslavě*, vol. 2 (Mladá Boleslav, 1920), pp. 158, 186.

28 Jan Šafránek, *Život a působení Jana Krouského* (Kolín, 1878), p. 7. ボヘミアでは、当初教育は教会や領主に任されてきたが、1774 年に 6 歳から 12 歳までの全ての児童に就学義務を課す一般学校令（Allgemeine Schulordnung）が公布され、国家による教育制度の整備が開始された。一般学校令は初等教育を対象とし、初等学校を①下級学校（Trivialschule）、②高等小学校（Hauptschule）、③規範学校（Normalschule）に分類し、それぞれの教育目標を明確に定めた。クロウスキーが通った下級学校は教区を学区とし、宗教、道徳、読み書き、計算が主要科目とされ、授業は母語で行われた。高等小学校は比較的大きな都市に設立され、下級学校で教えられる科目に加え、歴史、地理、将来の勉学や職業に必要な科目が教えられた。授業は第 3 学年以降、ドイツ語で行われた。規範学校は、高等小学校で教えられる科目を教授するとともに、教員養成コースを備えるとされた。*Česká politika* vol. 5 (Prague, 1913), pp. 198–203. なおカトゥシツェには 1774 年以前から学校が存在しており、一般学校令の公布後下級学校に再編されたと考えられる。SOA MB, Archiv obce Katusice, Obecní kronika Katusice, 1874, p. 7.

29 Šafránek, *Život a působení Jana Krouského*, p. 7. 当初愛国者の中心は学者・文人といった知識人であり、活動は主に学問・文芸の領域で行われた。しかし、次第に彼らの間から民衆の啓蒙の必要性を認識し、彼らのチェコ語への愛を育むとともに、経済的・文化的・道徳的向上を目指して啓蒙活動に従事するものが現れてくる。その一人がクラメリウスであった。彼はチェコ語による新聞を発行するとともに、1790 年にはチェスカー・エクスペディツェを設立し、民衆の啓蒙を目

ル（F. M. Pelcl）が著した年代記や[30]、プロハースカ（F. F. Procházka）が出版したダリミルの年代記など、愛国者に大きな影響を与えた書籍を読んでいたと伝えられる[31]。従って、クロウスキーはまず読書を通じて愛国者の活動に接していたと考えられる。

さらに1833年、熱心な愛国者であり、文人でもあった司祭ヴィナジツキー（K. A. Vinařický）が、同じ教区のコヴァーン（Kováň）に赴任してきたことは、クロウスキーのその後の活動に大きな影響を与えることになった[32]。

1803年に中央ボヘミアの都市スラニー（Slaný）で職人の子供として生まれたヴィナジツキーは、スラニーのギムナジウム時代から愛国者の活動に加わった。さらにプラハ、ウィーンの大学で哲学を学んだ後、プラハの神学校に入学し、そこでチェコ語による文芸活動を開始した[33]。その後、神学校校長の勧めでシュリク（Šlik）伯の家で家庭教師を務めた後、プラハ大司教のもとで儀典長（ceremoniář）となった。さらにコロヴラート（Kolowrat）伯のムニェホルピ（Měcholupy）の所領で司祭、再びプラハで儀典長を務めるなど各地で働いた。そして、文人チェラコフスキー（F. L. Čelakovský）や、歴史家パラツキー（F. Palacký）をはじめとするプラハや各地の愛国者と交流しつつ、チェコ語での創作・翻訳活動に従事した[34]。

ヴィナジツキーが創作・翻訳活動に従事していたことが示すように、チェコ語を学術・芸術で用いる言語として確立することを目指す愛国者たちは、この時代とりわけチェコ語による創作活動を熱心に行った[35]。同時にチェコ語による出版物の刊行にも力を入れ、1830年代には、ボヘミア王国博物館（Museum království Českého）によるチェコ語雑誌の発行がはじまり、重要なチェコ語メディアに成長した[36]。さらに愛国者は組織的・体系的にチェ

的とする出版物を多数発行した。愛国者と民衆の啓蒙活動については、Heroldová, “Rozvoj školství a osvěty v Čechách,” pp. 9–135; 桐生『近代ボヘミア農村』第2章。クラメリウスについては、Jan Novotný, *Václav Matěj Kramerius* (Prague, 1973).

30 シャフラーネクは書名をチェコ年代記としているが、おそらく『新チェコ年代記（*Nová kronika česká*）』を指していると考えられる。Šafránek, *Život a působení Jana Krouského*, p. 8. ペルツルは祖国ボヘミアの歴史を、民衆を含み、言語的に特徴づけられたネイションの歴史として描き、愛国者に影響を与えたとされる。Kutnar, *Obrozenské vlastenectví*, pp. 81–83.

31 Šafránek, *Život a působení Jana Krouského*, pp. 7–8. ダリミルの年代記とは、14世紀にチェコ語で執筆された年代記である。それ以前の年代記がラテン語で執筆されたのに対し、チェコ語で執筆されており、また植民による「ドイツ人」の進出を批判し、彼らの台頭に警告を鳴らした年代記として、1786年にプロハースカによって出版され、愛国者に広く読まれたといわれる。Kutnar, *Obrozenské vlastenectví*, pp. 129–130.

32 ヴィナジツキーのバイオグラフィーについては、主に以下の文献に依拠した。*Ottův slovník naučný*, vol. 26 (Prague, 1907), pp. 715–719. 以下、*Ottův slovník naučný* については書名と巻数のみ記す。

33 なお多くの愛国者同様、ヴィナジツキーも高等小学校以降の教育をドイツ語で受けている。

34 チェラコフスキーについては、Ibid., vol. 6, pp. 578–583. パラツキーは『ボヘミアとモラヴィアにおけるチェコ・ネイションの歴史（*Dějiny národu českého v Čechách a v Moravě*）』を著し、その後のチェコ史の叙述に大きな影響を与えた。パラツキーについては、Ibid., vol. 19, pp. 39–71; ニーデルハウゼル『総覧東欧ロシア史学史』89–92頁。

35 Hroch, *Na prahu národní existence*, pp. 151, 230–235; Vladimír Macura, *Znamení zrodu* (Prague, 1995), p. 128.

36 ボヘミア王国博物館は、シュテルンベルク伯らのイニシアチヴによって、1818年にボヘミア王国の繁栄を目指して設立された。1828年からは、パラツキーの編集のもとドイツ語とチェコ語の雑誌を発行し始めた。*Ottův slovník*, vol. 17, pp. 892–902.

コ語で出版活動を行うことを目指して、チェコ語百科事典の刊行を計画し[37]、またチェコ語書籍の出版を促進する組織マチツェ・チェスカー（Matice česká）の設立を進めた[38]。そしてヴィナジツキーもまた、これらの事業に積極的に参加していった。

このように熱心な愛国者であったヴィナジツキーは、コヴァーンへの赴任後も熱心に創作・翻訳活動を進めており、彼のもとには近隣やしばしばプラハからも愛国者が訪れた[39]。プラハから彼を訪問した人物のなかには、彼と特に親しかったチェラコフスキーやパラツキーのほか、『チェコ語・ドイツ語辞典（*Slovník česko-německý*）』を著した学者であり文人でもあったユングマン（J. Jungmann）[40]、『全方言によるスラヴ言語・文学史（*Geschichte der slawischen Sprache und Literatur nach allen Mundarten*）』などを著した上部ハンガリー出身の文人・学者であったシャファジーク（P. J. Šafařík）などもいた[41]。またプラハ以外からも、スカルスコ（Skalsko）の司祭プロハースカ（J. Procházka）、ブコヴノ（Bukovno）の司祭プファイファー（J. Pfeifer）、リブニュ（Libuň）の司祭であり文人としても活躍したマレク（A. Marek）をはじめとして、近隣の愛国者がヴィナジツキーを訪問した[42]。

クロウスキーはヴィナジツキーと懇意になり、彼を介して愛国者の活動に深くかかわることになった[43]。そして、1839 年にはマチツェ・チェスカーに農民として初めて加入した[44]。こうして愛国者の活動に加わったクロウスキーは、1840 年代以降活発に行動し、コヴァーンのヴィナジツキーのもとだけではなく、カトゥシツェのクロウスキーのもとでも、愛国者の集まりがみられるようになったと伝えられる[45]。

フロホは、聖職者が一般に中央と地方、地方間の社会的接触を媒介したこと、特にネイション形成運動においては、農民のコミュニティーとナショナルな世界（national milieu）の仲介者として機能したことを指摘している[46]。ヴィナジツキーについても、愛国者の活動の中心地であるプラハで学び、働いたのち地方の農村に赴任し、そこに愛国者のサークルを作りだし、愛国者の活動の媒介者として機能していることが見て取れる。ヴィナジツキーのみならず、彼と交流のあったスラーマ（F. Sláma）、ヴァツェク（V. A.Vacek）といった聖職者

37 1829 年から、パラツキーはチェコ語による百科事典の作成に着手した。百科事典は最終的に出版されなかったものの、その準備と出版に必要な財源を確保するために基金が作られ、この基金をもとに後述するマチツェ・チェスカーが設立された。Ibid., vol. 16, p. 982.

38 マチツェ・チェスカーは、上述したチェコ語百科事典の出版のために作られた基金をもとに、チェコ語の良質な書物を出版することを目的に設立された。詳しくは、Ibid., vol. 16, pp. 981–986; Hroch, *Na prahu národní existence*, pp. 230–232; Štaif, *Obezřetná elita*, p. 97.

39 ヴィナジツキーの活動、およびほかの愛国者との交流については、彼の書簡集で詳しく知ることができる。*Karla Aloisa Vinařického Korrespondence a spisy pamětní*, vol. 1–4 (Prague, 1903–1925).

40 ユングマンについては、*Ottův slovník*, vol. 13, pp. 668–677.

41 シャファジークについては Ibid., vol. 24, pp. 528–540.

42 Ibid., vol. 26, p. 716; Šafránek, “Z doby národního rána českého,” pp. 184–185.

43 Ibid., p. 185. なおクロウスキーは、1843 年にヴィナジツキーの妹と結婚している。J. V. Šimák, *Dopisování Jana Krouského a jeho přátel* (Prague, 1932), p. 8.

44 Šafránek, *Život a působení Jana Krouského*, pp. 8–9.

45 Ibid., p. 19.

46 Hroch, *Social Preconditions*, pp. 143–144.

の経歴からも、彼らがさまざまな場所に赴任し、各地の愛国者と交流しながら活動を展開していたことがわかる[47]。この時代、聖職者は愛国者の中核を成したが、民衆に身近な知識人であり、また各地を移動しながら学び、働く聖職者の存在は、愛国者のネットワークが拡張する上で特に重要な役割を果たしたと考えられる[48]。

以上みてきたように、クロウスキーはまず読書を通じて愛国者の活動に接し、その後ヴィナジツキーとの交流のなかで愛国者の活動に参加し始めた。こうして愛国者の活動に加わったクロウスキーは、自分の村やヴィナジツキーのもとで愛国者と会うだけではなく、ヴィナジツキーの紹介、あるいは独自に知り合った愛国者と手紙も交換していた。これらの書簡を手掛かりに、当時の愛国者がどのようなネットワークを形成し、いかなる活動を展開したか、以下、検討してゆきたい。

2. クロウスキーの書簡

2-1. クロウスキーの書簡集

クロウスキーは各地の愛国者と書簡を交わしていたが、書簡の現物は残されていない[49]。しかし、1932 年にシマークによって彼の書簡集が出版されている[50]。シマークによれば、クロウスキーが送った手紙は少数を除いて失われたか、行方が分かっていない。そのため、書簡集は主にクロウスキー宛に送られた手紙、およびクロウスキーの手元に残された彼の手紙の草案をまとめたものとなっている[51]。従って書簡集は、彼と各地の愛国者の交流の全貌を示すものではない。しかし、農村の愛国者の書簡を収めたものとして貴重であり、少なくとも当時の愛国者のネットワークと活動を知る重要な手掛かりにはなるだろう。そこで本稿ではこの書簡集を検討することを通じて、クロウスキーのネットワークと活動について考察してゆきたい。

書簡集には、1840 年から 1876 年までの間に交わされた 428 通の書簡、および書簡の草案が収められている。本稿は 19 世紀前半の愛国者のネットワークを検討対象とし、また大きな社会的・政治的変動が生ずる 1848 年革命期については別途考察が必要と考えられることから、ここでは 1840 年から 1847 年末までの書簡 157 通について分析してゆく。なお言語については、クロウスキー宛の書簡 8 通がドイツ語で書かれており、うち 7 通がプラハの法律家兼作曲家のミフル（K. Michl）によるものであるが、それ以外の書簡は全てチェコ語で書かれている[52]。

---

47 *Ottův slovník*, vol. 23, pp. 333–334; vol. 26, p. 282.

48 愛国者に占める聖職者の割合については、表 1 参照。

49 ボレスラフ郡文書館のクロウスキー家のフォンドには、彼の書簡は残されていない。SOA MB, Rodinný archiv Krouských.

50 Šimák, *Dopisování Jana Krouského*.

51 以下に示すように、書簡集に収められたクロウスキー宛に送られた手紙の数と、クロウスキーが送ったとされる手紙（の草案）の数にはかなりの差があり、シマークも特に後者については相当の欠落があると述べている。Ibid., p. 9.

52 ドイツ語による書簡は、Šimák, *Dopisování*, no. 5, 20, 23, 42, 43, 80, 86, 156. なおクロウスキーの書簡集については、煩雑さを避けるため、原則的にページ数ではなく書簡番号を記す。以上の

2-2. 書簡の分析

①相手の職業

ここで検討する 1840 年から 1847 年末までに交わされた 157 通の書簡のうち、クロウスキーが送ったものは 55 通、クロウスキー宛のものは 102 通ある。

まず書簡をやりとりした相手の職業を見てみると、クロウスキーと同じ農民はわずか一名であり、その他の人々の職業は多岐にわたる（表 2）。例えば、クロウスキーと最も多くの手

表 2　クロウスキーと書簡を交換した相手とその職業

氏　名	職業（※ 1）	クロウスキー宛の手紙（通）	クロウスキーからの手紙（通）	合計（通）
ネベスキー（V. B. Nebeský）	学生、のちに詩人	35	17	52
チェイカ（J. Čejka）	医師	10	6	16
クアドラート（A. Quadrát）	法律家、官吏	15	0	15
ミフル（F. Michl）	法律家、作曲家	7	4	11
コディム（F. S. Kodym）	医師、ジャーナリスト	4	5	9
ハヴェル（V. Havel）	歌手	4	1	5
リバ（J. J. Ryba）	領主庁官吏	3	2	5
ティーフトゥルンク（J. Tieftrunk）	学生、のちに医師	3	0	3
マチェヨフスキー（J. Matějovský）	農民	3	0	3
ケンヂーク（J. Kendík）	聖職者	2	0	2
ホシェク（J. Hošek）	化学者	2	0	2
リーゲル（F. L. Rieger）	法学博士	2	0	2
ホウジュヴィツ（J. Houžvic）	不明	2	0	2
ストラカ（P. Straka）	聖職者	1	1	2
サビナ（K. Sabina）	作家、ジャーナリスト	1	1	2
ポスピーシル（J. Pospíšil）	出版者	1	0	1
プロハースカ（V. Procházka）	聖職者	1	0	1
ルドルフ（Rudolf）	官吏	1	0	1
ネチャーセク（F. Nečásek）	聖職者	1	0	1
クレイチー（J. J. Krejčí）	学生、技術学校助手	1	0	1
シュマフスキー（Š. F. Šumavský）	作家	1	0	1
コーマース（J. Komers）	官吏	1	0	1
マトゥシュ（J. Mattusch）	医師	1	0	1
シュチェパーネク（J. N. Štepánek）	作家	0	1	1
ストゥドニチュカ（V. Studnička）	歌手	0	1	1
シャファジーク（P. J. Šafařík）	言語学者、作家	0	1	1
コラール（J. Kollár）	詩人	0	1	1
ラオテルバッハ（V. Lauterbach）	書籍商	0	1	1
フリッチュ（J. Frič）	法律家	0	1	1
投稿など	—	0	11（※ 2）	11
寄付	—	—	1（※ 3）	1
不明	—	0	1	1
合計	—	102	55	157

Šimák, *Dopisování* をもとに作成。

※ 1　職業は、書簡集のシマークによる注記、および以下の文献に基づく。*Ottův slovník naučný* vol.1–28 (Prague, 1888-1909).

※ 2　内訳は『チェコのミツバチ（*Česká wčela*）』が 5、『プラハ新聞（*Pražské nowiny*）』が 2、『花（*Kwěty*）』が 2、紙名不明が 1。

※ 3　チェコ産業学校（Česká průmyslová škola）設立のための寄付。

紙をやり取りしたネベスキー（V. B. Nebeský）は、当初はプラハの学生であり、詩作をはじめとする文芸活動でも活躍していた人物であった[53]。ネベスキーに次いで多くの手紙をやり取りしたのは、チェイカ（J. Čejka）、そしてクアドラート（A. Quadrát）である。チェイカはプラハの医師であったが、文学作品の翻訳など文芸活動にも従事していた[54]。またクアドラートは、当初ムラダー・ボレスラフ近隣の都市コスモノシ（Kosmonosy）の法律家であった[55]。

1840 年代の愛国者の社会構成については、貴族や聖職者の割合が低下し、官吏や学生などの中間層や小知識人の割合が増加しつつあったことが指摘されている[56]。クロウスキーと書簡をやり取りした相手をみても、当初から愛国者の中核となっていた文人や聖職者のほかに、官吏、医師、法律家、学生といった職業の人々が見られ、当時の愛国者の構成を反映していたといえる。

特に重要なことは、クロウスキーの相手の職業が多岐にわたっており、愛国者のネットワークが狭い職種の枠、さらに都市と農村の境界を超えて形成されていたことである。身分制が存在した 19 世紀前半には、一般に各社会層の行動は階層秩序の原則に統御されていた。そして、当時の都市と農村の間に存在した階層秩序を反映して、都市民の農村住民に対する態度は、明らかに優位の感情に伴われたものであったといわれる[57]。この点を考慮するならば、都市と農村の境界を超えて形成された愛国者のネットワークは、従来の階層秩序とは異なる原則に基づく、新たな社会的結合関係であった可能性を指摘できよう。他方で、クロウスキーは代々村長を輩出した家に生まれた富裕な農民であり、彼自身も村長を務めたことから、地域における名士といえる。そして、彼と手紙を交換した人々も主に知識人・中間層に分類され、基本的には名士と呼べる人々であった。従って、愛国者のネットワークは、狭い職種や都市と農村の境界を超えて形成された一方で、従来からの社会的威信が一定の役割を果たし、また階層的境界を有した可能性も指摘できる。史料状況から、従来のクロウスキーの人間関係と新たな愛国者のネットワークの異同や、愛国者のネットワークの階層的境界について詳細に検討することはできないが、以上の問題は、今後愛国者のネットワークについて研究する際に考察されるべき重要なテーマであると考えられる。

②手紙が送られてきた地域

次に、クロウスキーがやり取りした書簡を、地域に注目して検討してみよう。クロウスキーの書簡は全てカトゥシツェから送られており、また送り先の地名は書簡集には記されていない。従ってここでは、クロウスキー宛の手紙がどこから送られてきたかを検討することによって、彼のネットワークの地域的広がりについて考えてみたい（次頁表 3、次々頁地図 1）。

書簡のうち、156 番以外がミフルによる手紙であるが、手紙の内容からクロウスキーが彼にほとんど返事を送っていないことが読み取れる。

53 *Ottův slovník*, vol. 18, pp. 17–19.

54 Ibid., vol. 6, p. 573.

55 のちにヴルチツェ（Vlčice）の領主庁官吏となる。

56 Hroch, *Die Vorkämpfer*, p. 47; idem, *Social Preconditions*, p. 47; Štaif, *Obezřetná elita*, p. 97. 本稿の表 1 も参照。

57 Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 89, 426.

表 3　クロウスキー宛の書簡の送り元

送り元地名	郡（※ 1）	領邦あるいは国	書簡数
プラハ（Praha）	—	ボヘミア	42
コスモノシ（Kosmonosy）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	14
ウィーン（Vídeň）	—	ニーダーエスターライヒ	7
ニムニェジツェ（Niměřice）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	6
ノヴィー・ドゥヴール（Nový Dvůr u Kokořína）	ムニェルニーク	ボヘミア	4
ムシェノ（Mšeno）	ムニェルニーク	ボヘミア	2
ビェラー（Bělá）	ビェラー	ボヘミア	2
ソヴィーンキ（Sovínky）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	2
サンクトペテルブルク（Petrohrad）	—	ロシア	2
グログニッツ（Hlohnice）	—	ニーダーエスターライヒ	2
コヴァネツ（Kovanec）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	1
ムラダー・ボレスラフ（Mladá Boleslav）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	1
ドウブラヴィツェ（Doubravice）	？（※ 2）	ボヘミア	1
ドルニー・ブジェジャニ（Dolní Břežany）	プラハ西	ボヘミア	1
ブコヴノ（Bukovno）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	1
ヨゼフォドル（Josefodol）	ハヴリーチュクーフ・ブロト	ボヘミア	1
ヴルチツェ（Vlčice）	トゥルトノフ	ボヘミア	1
グラーツ（Štýrský Hradec）	—	シュタイアーマルク	1
コヴァーン（Kováň）	ムラダー・ボレスラフ	ボヘミア	1
ズデホヴィツェ（Zdechovice）	パルドゥビツェ	ボヘミア	1
不明、記載なし	—	—	9
合　計	—	—	102

Šimák, *Dopisování* をもとに作成。
※ 1　おおまなか場所を示すため、現在の郡名を示した。
※ 2　同一の地名が複数あり、特定できず。

まず圧倒的に多くの手紙が送られてきたのは、プラハからであった。手紙の内容は後で詳しく検討するが、プラハからの手紙は、愛国者のプラハでの活動について伝えるものが中心となっている。愛国者の活動が広がる上で、特に活動が活発であったプラハと地方との間の文化的接触が重要な意味を持ったといわれるが、クロウスキーの書簡からも、プラハと地方の愛国者が緊密な関係を結び、頻繁に情報や意見を交換していたことが見て取れる[58]。

しかし、クロウスキーが書簡をやりとりした相手は、プラハ在住の人々に限られなかった。表 3 にはコスモノシ、ニムニェジツェをはじめとして、クロウスキーが住むカトゥシツェのあるムラダー・ボレスラフ郡、および近隣のビェラー郡、ムニェルニーク郡の地名が多く挙がっている。つまりクロウスキーは、プラハのみならず、周辺地域の愛国者とも親しく交流しており、ボレスラフ郡周辺の愛国者同士が緊密な関係を結んでいたことがわかる。従って愛国者のネットワークは、プラハと地方の愛国者の間でのみ形成されたわけではなく、それぞれの地域内の愛国者の間でも形成されていたということができる。

同時に注目されるのは、クロウスキーのもとに、数は少ないもののボヘミア以外の地域からも書簡が送られている点である。具体的にはウィーン、ニーダーエスターライヒのグログニッツ、シュタイアーマルクのグラーツ、さらにロシアのサンクトペテルブルクである。こ

58　Hroch, *Na prahu národní existence*, pp. 211–216; Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 43, 144–170.

地図 1

れはクロウスキーと交流のあった愛国者たちが、学問あるいは職業のために居を移したことによるが、彼らはそれぞれ各地の様子を伝えるとともに、クロウスキーにボヘミアの状況を尋ねている[59]。特に興味深いのは、クロウスキーと親しかったネベスキーが、ウィーンから送った手紙である。勉強のためにウィーンに滞在していたネベスキーは、ウィーンのみならずハンガリー、クロアチアをはじめとするハプスブルク君主国各地のスラヴ人の状況、ケルンテンやシュタイアーマルクの「ナショナルな生活（národní život）」の活性化、またボヘミアの愛国者の活動に対する反響など、ウィーンで得た情報を書き送っている[60]。19 世紀前半のボヘミアの愛国者が、スラヴ主義の影響を強く受け、他地域での活動や他言語によ

59　Šimák, *Dopisování*, no. 67, 75, 76, 84, 87, 89, 91, 129, 130, 141, 143, 145.
60　Ibid., no. 67, 75, 76, 130.

る活動に強い関心を持っていたことはよく知られる[61]。ネベスキーの書簡もまた、愛国者がボヘミアにとどまらず、各地のスラヴ人の動向や「ナショナルな生活」に関心を寄せていたことを裏付けるとともに、愛国者が移動を通じてかなり広い地域の情報を得ていたことを示すといえる。そして、カトゥシツェ村の農民であったクロウスキーが形成したネットワークは、プラハとボレスラフ郡周辺を中心としていたものの、彼は出版物のみならず、書簡を介してより広い地域の情報を直接得ており、当時の農村の愛国者の情報網がかなりの広がりを持っていた可能性を示唆する。上述したようにクロウスキーの書簡には欠落が多く、各地の愛国者とのやり取りや、彼の思想と活動について詳細に検討することは困難である。しかし、当時の農村の愛国者が、ネットワークを介してボヘミアのみならず、より広い地域にかんする情報や見解を交換していた可能性があることは、今後農村の愛国者の思想と活動を考える際に考慮されるべき点として指摘しておきたい。

③内容

クロウスキーがカトゥシツェや、コヴァーンのヴィナジツキーのもとで愛国者と会っていたことには既に触れた。書簡においても、相手を自宅や催しに招待したり、相手を訪問した礼を伝えたりするなど、招待や訪問にかんする記述が比較的目につく。ここで検討している書簡 157 通のうち、約 5 分の 1 にあたる 29 通が招待や訪問に言及しており、クロウスキーが書簡をやり取りしていた相手と、比較的頻繁に会っていたことがわかる[62]。そして、その相手はボレスラフ郡周辺に住むものに限られず、プラハに居住するものも含まれた。従って、クロウスキーが自分の居住地周辺およびプラハの愛国者との間に形成したネットワークが、書簡による交流と直接的な接触に支えられた比較的緊密なものであったということができるだろう。このようにクロウスキーと各地の愛国者は親しく交流していたため、書簡には相手やその家族、知人の近況や、相手の慶事への祝いなども記されている[63]。

しかし、書簡の中心となっているのは、本人および他の愛国者が行ったさまざまな「愛国的（vlastenecký）」とされる活動についての記述であった。具体的には、愛国者が催した舞踏会や娯楽の集い[64]、あるいはチェコ語による演劇の上演[65]、各種協会の設立・活動[66]、学校の設立にかんする報告や意見などであるが[67]、なかでも圧倒的に多いのが、チェコ語による創作活動や書籍・定期刊行物に言及している書簡である[68]。創作活動、書籍・定期刊行物に言及している書簡は 95 通と書簡全体の 6 割を超え、さらにクロウスキー自身が雑誌・新聞宛に送った投稿も 10 通ある。上述したように、愛国者たちはチェコ語を学術・芸術で用いる言語として確立することを大きな目標とし、19 世紀半ばにいたるまでチェコ語によ

61 Jitka Lněničková, *České země v době předbřeznové: 1792–1848* (Prague, 1999), p. 141.
62 Šimák, *Dopisování*, no. 10, 31, 32, 34, 35, 44, 46, 47, 48, 49, 50 et passim.
63 Ibid., no. 37, 60, 78, 84, 89, 124, 140, 141, 147, 148 et passim.
64 Ibid., no. 3, 11, 17, 19, 53, 54, 56 et passim.
65 Ibid., no. 11, 12, 28, 47, 74, 78, 149 et passim.
66 Ibid., no. 77, 82.
67 Ibid., no. 138, 152, 154.
68 Ibid., no. 1, 2, 3, 4, 8, 11, 13, 15, 16, 17, 18, 19 et passim.

る創作、出版、読書といった活動をとりわけ重視していた。クロウスキーの書簡からも、同様の傾向を見て取ることができよう。

対照的に、具体的な政治状況に言及する書簡は非常に少ない。特に 1840 年代前半については、領主庁官吏のリバ（J. J. Ryba）、化学者のホシェク（J. Hošek）がクロウスキーに宛てた手紙のなかで、それぞれ領邦および君主国の統治と言語の問題について論じているほかは、直接的な政治状況に触れている書簡はほとんどみられない[69]。愛国者の活動は文芸・学問の領域から始まり、特に初期においては具体的な政治状況への関心は乏しかったといわれる[70]。クロウスキーの書簡からも、やはり同様の傾向を見て取ることができよう。

但し 1840 年代後半にはいると、変化の兆候があらわれる。1846 年にクロウスキーは、新たにハヴリーチェク（K. Havlíček）が編集者となった『プラハ新聞（*Pražské nowiny*）』に言及する形で、当時の政治状況の「ひどさ」と状況の打開の必要性など、政治について論じる書簡を送っている[71]。これまでの研究によっても、ジャーナリズムによる政治教育を重視するハヴリーチェクの登場が、愛国者の政治への関心を高めたことが指摘されている[72]。クロウスキーの関心の変化を通時的に追うことは、史料状況から困難であるが、政治状況への言及は、この時代の彼の書簡にあらわれた重要な変化とみなすことができよう[73]。クロウスキーのネットワークが創出する言説空間は、ハヴリーチェクが編集する『プラハ新聞』を媒介として、次第に政治についても議論される空間へと変化していったと推測することが可能だろう。

以上、クロウスキーの書簡について、書簡をやり取りした相手の職業、書簡が送られてきた地域、書簡の内容に注目して検討した。その結果、1840 年代のクロウスキーのネットワークが、狭い職種の枠や都市と農村の境界を超えて形成されていたこと、またプラハと地方、そして地域内の結びつきによって構成されていたことなどが明らかになった。それではこのようなネットワークを形成しながら、愛国者たちはいかに活動を展開していったのだろうか。以下、当時の愛国者が特に重点をおいていた書籍・定期刊行物の出版・普及、愛国的催し・組織の設立などを取り上げ、ネットワークとのかかわりにおいて具体的に検討してゆきたい。

3. 愛国者のネットワークと愛国的活動

3-1. 愛国者のネットワークと書籍・定期刊行物

①情報交換と議論

上述したように、プラハからクロウスキーに送られた手紙の中心となっていたのは、愛国者のプラハでの活動についての情報である。クロウスキーと最も多くの書簡をやりとりして

69 Šimák, *Dopisování*, no. 52, 141. この他には、出版活動に関連して検閲制度に言及している書簡が 2 通みられる。Ibid., no. 45, 105.

70 Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 34, 134.

71 Šimák, *Dopisování*, no. 151, 153.

72 Štaif,*Obezřetná elita*, p. 101.

73 なおクロウスキーは『プラハ新聞』に投稿もしており、彼の同紙への関心の高さがうかがえる。*Pražské nowiny*, 8. 1. 1846, no. 3; 14. 1. 1846, no. 5.

いたネベスキーは、プラハの愛国者の活動について比較的頻繁に書き送るとともに、クロウスキーにもムラダー・ボレスラフで「愛国的」催しなどを開くように勧めている[74]。

クロウスキーもまた、プラハからの情報に受け身の態度で接していたわけではなかった。例えばクロウスキーは、プラハのネベスキーに、どのような「愛国的な進歩」があったかを書き送るよう求め[75]、さらにネベスキーがプラハを離れたのちには、文人サビナに、プラハで何が起こっているか、状況がどのような方向に向かっているのか分からないとして、本人でも他の人でもよいので、プラハでの「愛国的事柄（vlastenecké záležitosti）」についてしばしば手紙を書き送って欲しいと伝えている。そして、ひとりでも愛国的ニュースを伝え、広めることができれば、農村にも効果があるとして、熱心にプラハの情報を求めているのであった[76]。この他にも、クロウスキーと近隣の愛国者クアドラートは、どちらかがプラハを訪問すると、そこで得られた情報を伝え合っており、地方の愛国者たちがプラハの動向に強い関心を持っていることがうかがえる[77]。

このように各地の愛国者によって形成されたネットワーク、そこで交わされる書簡は、愛国的活動の中心であるプラハの情報が各地に伝わる上で、重要な機能を果たしたといえよう。なかでも頻繁に伝えられたのが、愛国者による創作活動、書籍・定期刊行物にかんする情報である。クロウスキーの書簡からは、愛国者たちが書簡を通じて、創作活動の状況、書籍や定期刊行物の刊行情報、定期刊行物の内容や編集方針などについて情報や意見を交換していたことが分かる[78]。

愛国者たちがチェコ語による出版活動、出版物の普及に力を入れていたことには既に言及したが、愛国者のネットワークはこうした活動を推進する上で、重要な情報伝達の手段として機能したといえよう。そして、クロウスキーたちは、ネットワークを介して情報を交換しながら書籍や定期刊行物を購入したり、貸し借りしたのみならず、さまざまな意見を交換することを通じて、これらの新たな出版物についてチェコ語で議論する空間を創出していったということができるだろう[79]。

但し当時の愛国者はドイツ語による教育を受けたものが中心であり、またメディアにおいてもドイツ語が圧倒的な地位を確保していた。従ってクロウスキーらが話題にしたり、読んだり、貸借した書物のなかには、ドイツ語のものも含まれた[80]。史料状況から、本稿ではこの問題にこれ以上立ち入ることはできないが、愛国者各人、およびそのネットワークがどのようにドイツ語の書物とかかわったかについては、チェコ語の言論空間の成立過程、そしてドイツ語とチェコ語の言論空間の関係を明らかにする上で検討されるべき重要な問題であることを指摘しておきたい。

---

74 Šimák, *Dopisování*, no. 11, 13, 17, 38, 39, 45 et passim.
75 Ibid., no. 34.
76 Ibid., no. 70.
77 Ibid., no. 31, 74.
78 Ibid., no. 13, 93, 100, 131, 134 et passim.
79 クロウスキーの書簡のなかには、書籍の購入だけではなく、貸し借りに関する記述が比較的多く見られる。Ibid., no. 13, 29, 31, 40, 55, 56 et passim.
80 Ibid., no. 22, 24, 25, 33, 55, 56, 93.

②書籍・定期刊行物の流通

クロウスキーの書簡からは、愛国者のネットワークが単なる情報交換の手段や議論の空間として機能しただけではなく、実際の書物の流通をより積極的なかたちで促進する機能も果たしていたことも浮かび上がってくる。

これまでも述べてきたように、愛国者たちはチェコ語による書籍・定期刊行物の出版を精力的に進めたが、当初チェコ語の出版物は読者を獲得することが難しく、出版活動は困難を伴った。というのも、当時一定の教育を受け読書習慣を身に付けた人々は一般にドイツ語を理解し、またメディアにおいてもドイツ語が圧倒的な地位を確保していたことから、通常利用する言語に関係なく、慣習的に読書はドイツ語で行われることが多かったからである[81]。以上の事情もあり、当時はチェコ語書籍の出版に先立って予約購読者を募り、出版資金を確保したのちに出版するという方法がとられることが多かった。そして、クロウスキーの書簡からは、愛国者たちがネットワークを利用して予約購読者を確保している様子が看取できる。

例えば、クロウスキーと親しかったプラハのチェイカ（J. Čejka）は、詩集の予約購読票を送って、クロウスキーに予約購読者を募るように求めている[82]。またコラール（J. Kollár）の説教集出版の際には、クロウスキーのみならず各地の愛国者が、各人の周辺で予約購読者を募っている様子がうかがえる[83]。

ネットワークを通じた出版物の普及にかんしては、特にクロウスキーと、プラハの医師でありジャーナリストでもあったコディム（F. S. Kodym）とのやりとりが興味深いので、少し詳しく検討してみたい。

コディムは、学生時代から愛国者の活動に加わったが、民衆の教育に特に強い関心を持っており、1844 年に民衆向けのチェコ語の物理雑誌『日曜の娯楽（*Zábawy nedělnj*）』を創刊した[84]。そして、この年の 3 月 7 日付でクロウスキーに手紙を送り、『日曜の娯楽』の普及に協力して欲しいと伝えている[85]。クロウスキーに宛てた手紙のなかでコディムは、この雑誌はネイションの教育と精神的陶冶を目的とするものであり、できるだけ多くの人々に送りたい、そのためには地方（kraje）に住む熱心で啓蒙を愛する愛国者に、民衆の間で雑誌を広めてもらうことが一番良い方法であると述べて、クロウスキーに雑誌の普及を依頼し、雑誌を 2 巻各 20 部ずつ計 40 部送ったのである[86]。

この手紙を受けて、クロウスキーはコディムに返事を送り、コディムの努力に感謝し、民衆にとっての教育の重要性を強調するとともに、雑誌の普及に努め、売れ残ったものについては村長に売ってくれるよう近くの領主庁に送ってみる、と伝えている[87]。

---

81 Hroch, *Na prahu národní existence*, pp. 211–213.
82 Šimák, *Dopisování*, no. 142, 147.
83 Ibid., no. 69, 73.
84 コディムについては、桐生『近代ボヘミア農村』96 頁。
85 なおコディムはクロウスキーを直接知らず、ヴィナジツキーの紹介で手紙を送ったとされる。Šimák, *Dopisování*, p. 103.
86 Ibid., no. 81.
87 Ibid., no. 94.

その後もクロウスキーは、コディムに宛てて『日曜の娯楽』の販売状況を知らせる手紙を送っている。1845 年春の手紙では、当初は苦労したものの、このところ『日曜の娯楽』の読者が順調に増えて 25 人となり、その内訳は司祭 1 名、牧師 1 名、博士 1 名、教師 2 名、職人 2 名、農民 16 名、小農 2 名であると伝えている [88]。

以上のやりとりからは、愛国者のネットワークが、実際に雑誌が普及する上で非常に重要な機能を果たしていることが分かる。特に注目されるのは、クロウスキーを介して農民、小農、職人といった、当時読書習慣があまりないといわれ、また愛国者に占める割合の低い人々が、雑誌の購読者となっている点である。コディムは民衆の間で雑誌を普及させたいという意図をもって、クロウスキーに依頼をしたが、その意図はある程度実現したといえるだろう。

クロウスキーの近隣の村に住む農民が、クロウスキーが周囲の農民に読書を勧め、しばしば雑誌などの予約購読票を配布していたと伝えていることからも、実際に彼がカトゥシツェ村周辺の村々で書物の普及に努めていたことがうかがえる [89]。そして、クロウスキー自身が、信頼できる人の言葉は民衆に影響を与え、小さな村でも多くの購読者を獲得できたと述べているように、農村の愛国者の活動は周囲の農村住民に一定の効果を与えたと考えられる [90]。

『日曜の娯楽』の刊行にあたって、コディムはクロウスキー以外の農村の愛国者にも協力を依頼していたといわれるが、こうしてプラハと地方の愛国者たちは、相互に連絡をとりあいながら、出版物の普及に取り組んでいったのである [91]。チェコ語の定期刊行物は、愛国者の狭いサークルを超えて活動を広め、新たな愛国者を獲得することを大きな目的として発行が開始されたといわれる [92]。しかし、定期刊行物は何もせずに自然に普及し得たわけではなく、上述した事例は、定期刊行物の実際の普及にあたって、プラハと地方の愛国者のネットワークが大きな役割を果たしたことを示している。そして、プラハの愛国者と緊密な関係を結びつつ、地方でチェコ語出版物の普及に努めるクロウスキーのような愛国者の存在は、これらの出版物、ひいては愛国者のネットワークが各地の一般民衆まで広がってゆく上で、大きく寄与することになったと考えられる。

③書籍・定期刊行物の刊行

さらに愛国者のネットワークは、書籍・定期刊行物の読者と出版資金の確保のみならず、出版物、特に定期刊行物の実際の刊行作業も支えた。

1830 年代頃から愛国者たちは、より広範な層から新たな愛国者を獲得するために、さま

88 Ibid., no. 103.

89 F. Zuman, “Jan Evangelista Konopas, písmák v Sudoměři a jeho deník,” *Časopis pro dějiny venkova*, 1940, p. 215; 1941, pp. 32, 37–38. クロウスキーは、上述した書簡のように、農村における教育の重要性、書物普及の重要性をしばしば論じている。Šimák, *Dopisování*, no. 4, 103, 115.

90 Ibid., no. 73.

91 E. Reich, “Literární a buditelská práce Dr. Filipa Stanislava Kodyma a jeho metody šíření zemědělského pokroku,” *Věstník Československé akademie zemědělské* 10 (1935), p. 679. 出版物を普及させるために、各地の協力者に出版物を送り、購入者を募ってもらうという方法は、既にクラメリウスが行っており、コディムもそれにならったと考えられる。Novotný, *Václav Matěj Kramerius*, p. 222.

92 Hroch, *Na prahu národní existence*, p. 70.

ざまな試みを開始した。そのひとつが『チェコのミツバチ（*Česká wčela*）』や『花（*Kwěty*）』といった、一般の読者を対象とした読み物雑誌の創刊であった[93]。チェコ語の出版物は、読者のみならず書き手の不足にも苦しんだこと、また愛国的活動についての情報を交換することが重視されたことから、これらの雑誌は寄稿・投稿を掲載していた。1840 年代には、『チェコのミツバチ』も『花』も通信欄を設け、プラハのみならず各地からの報告を積極的に掲載した。そして、プラハと各地の愛国者のネットワークは、これらの雑誌に掲載する記事を調達する際にも機能し、雑誌の刊行も支えることになったと考えられる。

文芸活動に関心を持ち、カトゥシツェ周辺で精力的に行動していたクロウスキーは、カトゥシツェ周辺の愛国者の活動状況や、活動を広める方法などについて、上述した 2 誌にしばしば寄稿した[94]。全ての記事について掲載の経緯を知ることができるわけではないが、なかには依頼を受けて記事を執筆していることが明らかなケースも見られる。例えば 1845 年には、プラハのチェイカから農村向けの記事を執筆するよう依頼を受けた。そしてクロウスキーは、『チェコのミツバチ』に農村を繁栄させる方法や、農村に本を広める意義などについて記事を執筆している[95]。

また 1838 年から、プラハのボヘミア王国愛国農業協会（k. k. patriotisch-ökonomische Gesellschaft im Königreich Böhmen）によって、農村住民向けの雑誌がチェコ語で刊行され始めた[96]。この雑誌の編集者に就任したクレイチー（J. J. Krejčí）もまた、クロウスキーに記事を執筆するよう依頼している[97]。

クロウスキーが執筆の依頼を受けたのがともに農村、農民向けの記事であったことを考えると、雑誌の編集者たちは、農村での読者の拡大を強く意識して執筆を頼んだと推測される。そして、プラハの編集者たちにとって、農村の事情をよく知るクロウスキーのような人物は、頼もしい協力者であったと考えられる[98]。

以上数少ない事例からではあるが、定期刊行物の記事の調達にあたっても、プラハと各地の愛国者のネットワークは一定の機能を果たし、各地からの寄稿・投稿に大きく依拠していた当時の定期刊行物の発行を支えることになったと考えることができる。上述したように、チェコ語の定期刊行物は、既存の愛国者のサークルを超えて活動を広め、新たな愛国者を獲得することを大きな目的として発行が始められた。プラハと各地の愛国者のネットワークは、発行・流通などさまざまな面でチェコ語の定期刊行物を支え、さらにこうして刊行された定期刊行物を媒介としながら拡張することになったといえるだろう。

93　それまでのチェコ語の雑誌は、教養層を対象にした学術的なものが中心であった。Štaif, *Obezřetná elita*, pp. 48–49; Lněničková, *České země v době předbřeznové*, p. 144.

94　Šimák, *Dopisování*, no. 6, 98, 102, 104, 115, 118, 119.

95　Ibid., no. 99, 101, 105;*Česká wčela*, 22. 5. 1845, p. 243; 24. 5. 1845, pp. 247–248; 10. 6. 1845, p. 185; 14. 6. 1845, p. 188.

96　ボヘミア王国愛国農業協会は、重農主義思想の影響のもと、1770 年に設立された農業振興を目的とする組織である。桐生『近代ボヘミア農村』95 頁。

97　Šimák, *Dopisování*, no. 131.

98　当時は、チェコ語で農業や農村の記事を執筆できるものが非常に少なかったといわれる。František Lom, “Vývoj a význam zemědělského tisku,” *Vědecké práce Zemědělského muzea* (1985), pp. 14, 17.

3-2. 愛国者のネットワークと愛国的催し・組織

19 世紀前半の愛国者たちは、チェコ語による出版活動や書物の普及に力を注いだが、それ以外にも自らの居住地周辺でさまざまな活動を行った。ここでは各地で開かれた催し、組織の設立といった事例を取り上げて、愛国者のネットワークとの関連において検討してみたい。

①愛国的催し

クロウスキーと書簡をやり取りした愛国者たちは、チェコ語による演劇の上演をはじめとして、プラハを中心とする各地の愛国者たちによる催しについても情報を伝えていた[99]。

なかでもこの時代に愛国者の間で話題となっていたのは、愛国的舞踏会（vlastenecký bál）あるいはチェコ舞踏会（český bál）と呼ばれる催しや、ベセダ（beseda）と呼ばれる娯楽の集いであった。愛国者たちは自らの狭いサークルを超えて活動を広め、より広範な層から新たな愛国者を獲得するために、1830 年代から創作・出版活動以外にも遠足や朗読会の催行など、さまざまな試みをはじめていた。その一環として最初のチェコ舞踏会が、1840 年 2 月 5 日に、劇作家ティル（J. K. Tyl）が中心となって、プラハで開催された[100]。これは入場券やメニューなどをすべてチェコ語で作成し、ナショナル・カラー（národní barvy）の赤と白で飾り付けられた会場で、ナショナルな服装（národní kroj）を着てダンスを踊り、チェコ語で会話をする、という催しであった。そして、プラハで開催された 2 回目のチェコ舞踏会には 2500 人が参加し、3 回目にはさらに多くの参加者が集まったと伝えられる。こうして始まったチェコ舞踏会やベセダは、娯楽を通じてより多くの人々の興味を誘いながら、チェコ語を社交の言語とすることでチェコ語の地位をさらに高め、チェコ語を媒介とする新たなコミュニケーション空間を形成しようとする試みであったといえる[101]。

クロウスキーがプラハの愛国者と交換した書簡のなかでも、愛国的舞踏会やベセダがしばしば話題となっている[102]。クロウスキーも舞踏会やベセダを、人々を愛国者にする重要な手段とみなして強い関心を持っていた。そして、ある書簡のなかでは、舞踏会についていろいろな雑誌が記事を載せているが全て不十分で、舞踏会について良く理解するためには、実際に経験しなければならないと強調している[103]。こうしてチェコ舞踏会やベセダに強い関心を持つクロウスキーは、実際にカトゥシツェ村やその周辺でこれらの催しを組織していった。

1841 年 7 月の聖アナの日には、ムラダー・ボレスラフの国家官吏プラチェク（F. Plaček）とともに、周辺の自治体の協力も得て、ムラダー・ボレスラフ郊外の湯治場ボジー・ヴォダ

99 Šimák, *Dopisování*, no. 11, 47, 61, 74, 78, 149 et passim.

100 クロウスキーと特に親しかったネベスキーも、この舞踏会の組織に協力している。František Čapka, *Dějiny zemí Koruny české v datech* (Prague, 1999), p. 470.

101 なおダンスを中心にした舞踏会に対し、ベセダではチェコ語の詩が朗読されたり、コンサートなどが行われた。チェコ舞踏会とベセダについては、*Květy* 10 (1885), p. 385; Lněničková, *České země v době předbřeznové*, p. 146; Heroldová, “Rozvoj školství a osvěty v Čechách,” pp. 46–47; 篠原琢「祭典熱の時代」近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社、2008 年、557–560 頁。

102 Šimák, *Dopisování*, no. 5, 11, 13, 17, 23, 37, 78 et passim.

103 Ibid., no. 56.

（Boží voda）でベセダを開いた。これは同年 5 月にプラハでティルが催したベセダをモデルとした、遠足とコンサートを組み合わせたような娯楽の催しであった。そして、会場はナショナル・カラーの装飾とチェコ語の標語で飾られ、コンサートではナショナルな歌（národní písně）が歌われ、催しに合わせてヴィナジツキーが特別に出版した詩集が頒布されたと報告されている [104]。

クロウスキーの活動はこれで終わらず、同年 8 月 1 日には、彼と親しいホシェクと協力して、ムラダー・ボレスラフ近くの小都市コスモノシ郊外の丘で、やはり遠足、コンサート、ダンスなどを組み合わせたベセダを開いた [105]。さらに翌年の謝肉祭には、ムラダー・ボレスラフでチェコ舞踏会を開催し [106]、同年 12 月には、プラハや他の都市と同じようにはできないと述べつつも、自分の住むカトゥシツェで愛国的ベセダを開き、周辺各地の愛国者も招待している [107]。そして、クロウスキーの書簡からは、彼のみならず、この時期ほかの愛国者たちもそれぞれの居住地でベセダを開き、相互に招待しあっていることがうかがえるのである [108]。

チェコ舞踏会やベセダは、プラハの催しをモデルとして始まり、その点でプラハの愛国者と地方の愛国者との結びつきに支えられていた。しかし同時に、ボレスラフやコスモノシの催しが、クロウスキーとその周辺に住む親しい友人によって組織されたことが示すように、地方における舞踏会やベセダは、愛国者の地域的なネットワークにも大きく依拠していた。従って各地の愛国者たちは、相互の協力関係を強化しながらこれらの催しを組織し、活動のさらなる普及に努めていったということができるだろう。

②組織の設立

クロウスキーは、カトゥシツェ周辺で機会あるごとに舞踏会やベセダを催しただけではなかった。1846 年には、クロウスキーおよび彼と親しい牧師ストラカが中心になって、カトゥシツェと近隣のコヴァネツ（Kovanec）に、それぞれ読書協会を設立した [109]。

読書協会をはじめとする結社的組織の設立もまた、1830 年代以降、愛国者たちが積極的に推進した活動のひとつであった。結社は、愛国者の間の関係を強化する手段であるとともに重要な教育の場とみなされ、設立が推奨された。とりわけ読書協会は、チェコ語の書物を普及させ、読書を促進する効果も期待され、1830 年代以降設立が進んだ。さらに 1846 年にはプラハで市民ベセダ（Měšťanská beseda）が創設されるなど、当該期にはプラハを中心に結社活動が活発化しつつあった [110]。

---

104 *Kwěty*, 12. 8. 1841, pp. 253–254; Ferdinand Strejček, *Jak se probouzela Mladá Boleslav* (Mladá Boleslav, 1929), pp. 46–47.

105 *Kwěty*, 19. 8. 1841, pp. 263–264.

106 *Kwěty*, 9. 2. 1842, p. 44; Šimák, *Dopisování*, no. 19; Strejček, *Jak se probouzela Mladá Boleslav*, p. 47.

107 Šimák, *Dopisování*, no. 48.

108 Ibid., no. 69, 146.

109 *Pražské nowiny*, 14. 1. 1846, p. 20.

110 Hroch, *Na prahu národní existence*, p. 213; Heroldová, “Rozvoj školství a osvěty v Čechách,” pp. 37–38, 45; Zdeněk Šimeček, “Půjčovny knih a čtenářské společnosti v českých zemích a jejich působení do roku 1848,” *Československý časopis historický* (1981), pp. 63–88.

クロウスキーが交わした書簡においても、結社がしばしば話題に上っているが、クロウスキーたちによるふたつの読書協会も、プラハを中心とする結社活動に刺激を受けて設立されたと考えられる[111]。クロウスキーは『プラハ新聞（*Pražské nowiny*）』に、これらふたつの読書協会について記事を寄せている。それによれば、カトゥシツェとコヴァネツの読書協会は、クロウスキーおよび彼と親しい牧師ストラカが中心になって設立された。そして、カトゥシツェの読書協会は当時村長であったクロウスキーの父の寄付によって、またコヴァネツの協会は募金によって、チェコ語書籍の出版を促進する組織であるマチツェ・チェスカーに加入した。クロウスキーによれば、こうした試みは農民や手工業者をはじめとする、さほど裕福ではない人々も含め、全階級に読書を広める有効な方法なのであった。そして、カトゥシツェとコヴァネツでの試みは、市民ベセダや国民博物館（Národní museum）などを設立したプラハの市民の例に倣ったものであり、これらは新たな時代に進むための義務、ナショナルな生活（národní život）に飛躍をもたらすものなのであった[112]。

こうしてクロウスキーはプラハでの動きに刺激を受け、周囲の友人と協力しつつ、カトゥシツェとその周辺に読書協会を設立した。本節第一項で述べた『日曜の娯楽』の事例が示すように、クロウスキーはチェコ語の書物の普及に努めていたが、その努力は単なる予約購読の推進に終わらず、読書協会という新たな結社的組織の設立も伴ったのである。

18 世紀末から現れ始める愛国者は、次第にプラハと地方の間にネットワークを形成し、新しい広域的な社会的結合関係を創出していった。彼らは、そのネットワークに支えられながらさらに活動を普及させる努力を進めるなかで、地域社会にも結社的組織という新たな社会的結合関係を生み出していった。こうして愛国者の活動は、新たにさまざまな社会的結合関係を生み出しつつ広がっていったと考えられる。

おわりに

カトゥシツェ村のクロウスキーは、隷農制下に生まれた農民であったが、まず読書を通じて愛国者の活動に接し、その後近隣のコヴァーンに赴任してきた聖職者ヴィナジツキーとの交流のなかで、愛国者の活動に本格的に参加し始めた。そして、プラハのみならず周辺地域の愛国者との間でネットワークを形成し、情報や意見を交換するなかで、出版物をはじめとするさまざまな「愛国的」事柄や試みについてチェコ語で議論する新たな空間を創出してゆくとともに、書物の普及・催しの組織・読書協会の設立といった活動を進めていったのである。

本稿で検討したクロウスキーの事例から明らかとなったのは、愛国者の活動の中心地はプラハであったものの、活動を効果的に展開してゆくためには、プラハと地方の愛国者の協働が不可欠であり、両者の相互交渉のなかで彼らの活動が展開されたということである。特に 1830 年代以降、愛国者たちは自らの狭いサークルを超えて活動を広め、より広範な層から新たな愛国者を獲得するために、定期刊行物の刊行、読書協会をはじめとする結社の設立、

111 Šimák, *Dopisování*, no. 76, 77, 78, 82.

112 *Pražské nowiny*, 14. 1. 1846, p. 20. なお「国民博物館（Národní museum）」とは、ボヘミア王国博物館のことを指していると考えられる。

催しの組織、学校の設立、劇場の建設など、さまざまな取り組みを行った。但し、プラハの愛国者だけでこうした活動や組織の設立を進めることは不可能であり、効果的に活動を展開するためには、プラハと地方の愛国者、および地方の愛国者の間で形成されつつあったネットワークに依拠することが不可欠だった。従って 1830 年代以降愛国者が行った多様な取り組みは、徐々に形成されつつあったプラハと地方の愛国者のネットワークに支えられつつ、さらにそれを拡張してゆこうとする試みであったということができる。つまり愛国者のネットワークは、プラハから地方へ一方向的に広まったわけではなく、プラハと地方の愛国者の相互交渉のなかで、形成・拡張が進んだと考えるべきなのである。

同時に重要なことは、愛国者の活動が、新たにさまざまな社会的結合関係を生み出しつつ広まっていったと考えられることである。書簡から浮かび上がるクロウスキーのネットワークは、狭い職種の枠、さらに都市と農村の境界を超えて形成されており、当時の愛国者のネットワークが従来の階層秩序とは異なる原則に基づく、新たな社会的結合関係であった可能性を指摘できる。さらに愛国者の活動を広めるために、1830 年代以降進められた読書協会などの設立は、地域社会に結社的組織という新たな社会的結合関係を生み出すことになった。本稿では、愛国者のネットワークに先行する従来の社会的結合関係について検討することができなかったため、以上の指摘を確実なものとするためには、今後さらなる考察が必要である。しかし、従来の研究が愛国者のネットワークを単なるアイデンティティの伝達網ととらえ、ネットワークの拡張を目的論的・単線的過程としてとらえてきたことを考慮するならば、愛国者の活動が、新たな社会的結合関係の形成を伴いながら展開された可能性があることは強調されておくべきだろう。

以上、本稿ではクロウスキーの書簡を史料とし、彼の事例から 19 世紀前半の愛国者のネットワークについて考察してきた。最後に、本稿の議論を踏まえて今後検討されるべき課題を挙げて、本稿を結ぶことにしたい。

一つ目は、既に指摘した愛国者のネットワークとそれに先行する社会的結合関係との関係である。第 2 節で論じたように、愛国者のネットワークは、狭い職種や都市と農村の境界を超えて形成された一方で、地域の名士と呼べる人々を中心に構成されており、従来からの社会的威信が一定の役割を果たした可能性も指摘できる。本稿では十分に検討できなかったが、愛国者のネットワークの特徴は、先行する社会的結合関係との連続性と相違点を考察して初めて明らかにすることができるであろう。この点を考察することによって、愛国者の活動を単に言語やアイデンティティの問題としてではなく、既存の階層秩序や権力関係とのかかわりにおいて検討することが可能となり、愛国者の活動がボヘミア社会にいかなる変化をもたらしたのか、より広い視野から明らかにできるだろう。

今後の課題の二つ目は、愛国者各人およびそのネットワークとドイツ語の言論空間との関係である。本稿で述べたように、教育やメディアにおいてドイツ語が圧倒的な地位を確保するなか、愛国者たちが話題にしたり、読んだり、貸借した書物のなかには、ドイツ語のものも含まれていた。つまりチェコ語の言論空間は、ドイツ語の単純な排除によって形成が進められたわけではなく、ドイツ語の言論空間と一定の関係を保ちながら形成が進んだと考えられる。従って愛国者各人およびそのネットワークが、ドイツ語の言論空間といかにかかわったかについて検討することは、チェコ語の言論空間の成立過程を明らかにする上で、不可欠

の作業であると考えられる。また現在、ドイツ語を中心に、ハプスブルク君主国における出版物を媒介とした言論空間の形成過程について研究が進められている。チェコ語とドイツ語の言論空間の関係を明らかにすることは、こうした研究の進展にも寄与することになる[113]。

今後の課題の三つ目は、19 世紀前半の愛国者のネットワークと、19 世紀後半のボヘミア各地における政治的･社会的動向との関係である。本稿の考察から､1840 年代のカトゥシツェを含むボレスラフ周辺地域には、愛国者のネットワークが形成されつつあったがことが明らかとなったが、1848 年革命期以降、この地域では非常に活発な政治的・社会的活動が見られるようになる。1850 年代後半から 1860 年代にかけての時代には、ボレスラフ周辺の結社や自治機関はチェコ・リベラル派の活動の場となり、クロウスキーも彼らと協力しながら結社や自治機関で活躍するとともに、ボヘミア議会議員も務めることになる[114]。序で述べたように、ボヘミア史研究においては 1848 年革命期前後での研究の断絶が顕著であるが、クロウスキーとボレスラフ周辺地域の事例からも、19 世紀前半の愛国者のネットワークと 19 世紀後半の各地の政治的・社会的動向には密接な関係があったと推測され、両時期を通して考察する必要があるのは明らかである。

19 世紀前半には、本稿で扱ったボレスラフ周辺以外の地域でも、愛国者のネットワークが形成されつつあったといわれるが、具体的な分析はほとんど行われていない。今後これら各地を対象に愛国者のネットワークを検討し、さらに 19 世紀後半の各地の政治的・社会的動向を考察してゆくことは、ボヘミア史研究に顕著な 1848 年革命期前後での研究の断絶を克服するとともに、これまでプラハを中心に行われてきたボヘミアの政治史研究やナショナリズム研究に新たな展望を開くことになる。

---

113 水野博子他編『ハプスブルク史研究入門』昭和堂、2013 年、102–104 頁。

114 クロウスキー、およびボレスラフ周辺の 1848 年以降の動きについては、Šafránek, *Život a působení Jana Krouského*, pp. 20–71; Strejček, *Jak se probouzela Mladá Boleslav*, pp. 68–132; 桐生『近代ボヘミア農村』第 4 章。